源氏絵における琴（きん）と和琴の絵画表現の研究（Ⅱ）

川島　絹江

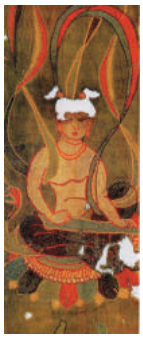
１、はじめに

前号に「源氏絵における琴（きん）と和琴の絵画表現の研究」を発表し、多くの反響があった。中でも、中野幸一先生から**石山寺蔵四百画面『源氏物語画帖』**を視野に入れるようにとのご助言をいただいた。この画帖は片桐弥生氏(注1）によれば土佐派、江戸中期の成立と推定され、四百面と、破格の画数である。実は前回、紙面の都合上入れることができず、対象を江戸初期までとした。今回は前号の補足をするとともに、続編として石山寺蔵四百画面『源氏物語画帖』を中心に琴（きん）と和琴の絵画表現について論じたい。

まず補足しておく。「琴（きん）」は漢字仮名併記である。『源氏物語』CD-ROMで調査した結果、中国伝来の七絃琴を「きん（きむ）」と表記する場合が42例と圧倒的に多く、「きんの御こと」６例、高貴な人に関わる場合に使われ、「きんのこと」は手習巻で横川の尼君に母尼が弾くように勧める場面１例のみ。研究者の多くが「こと」との混同を避けるため、「琴の琴」と表記するが、仮名書きを生かし、かつ、対象を明確にするため、漢字仮名並記の「琴（きん）」を提唱してきた。なかなかご理解いただけないので改めて提唱する。

２、世界最古の弾琴の図

世界最古の弾琴図は中国、南京市の西善橋東晋墓の**「竹林七賢・栄啓期」塼画**であろう。西善橋宮山の北麓で1960年に発掘された室墓の南壁に、嵇康・阮籍・山濤・王戎、北壁に向秀・劉霊（伶）・阮咸・栄啓期が配された刻画である。各々樹木で分けられ、名が記される。南朝の東晋か、下絵は顧愷之のような有名な画家が書いたであろうと言われる(注2)。琴（きん）の名手である嵇康は左膝に琴頭を載せ、実際の弾奏姿と左右逆である。これは栄啓期も同様。刻画故かといえば、文字は正刻で、阮咸を弾く姿は正しい。本場の中国においても、琴（きん）の弾奏姿が正しく認識されていなかったということである。



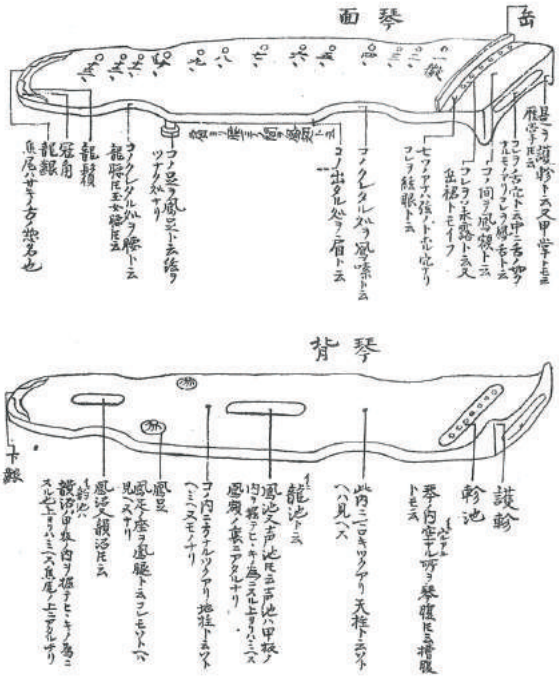
３、日本最古の琴（きん）

日本においては最古の弾琴図は**法隆寺献納宝物の繍仏裂**（N32・７世紀後半）であろう。天女が右膝の上に琴頭を載せて弾奏している。

最古の**七絃琴**は、**法隆寺献納宝物**（N102）で現在は東京国立博物館蔵である。龍池の中に墨書で「開元十二年歳在甲子五月五日於九龍縣造」の十八字が二行に書かれている。724年、四川省で作られた唐代の名品である。

4、琴（きん）の名称

荻生徂来が『琴学大意抄』に琴（きん）の構造と各部名称を図を記しており、『東京成徳短期大学紀要』第37号（2004・3）に国立国会図書館蔵本を底本とした「荻生徂徠著『琴学大意抄』翻刻」を発表したので、右に国会図書館の許可を得て転載する。中国明代の『風宣玄品』（朱厚熺著・嘉靖18（1539）年）の琴制図では裏面の中央の穴を「池」、琴尾に近い方を「沼」とする。二本の足を鳳凰の足、「鳳足（ほうそく）」と呼ぶ。徂来は鳳足を挟んで琴尾側を「鳳沼（ほうしょう）」又は韻沼（注3）、中央の池を鳳池、声池、「龍池（りゅうち）」と諸説を挙げる。『正倉院宝物』（増補改訂正倉院事務所編朝日新聞社、1987−1989）等の解説では「鳳沼」「龍池」を使用する。混同を避けるためにこれがよかろう。



5、源氏絵に描かれた琴（きん）の場面

前号のａ～ｇにｈを加え、★印で追加。調査は『石山寺蔵四百画面　源氏物語画帖』（鷲尾遍隆石山寺座主監修・中野幸一早稲田大学名誉教授編集・勉誠出版・2005年６月刊）を使用。画像転載の許可を戴いた。深謝申し上げる。

ａ．国宝『源氏物語絵巻』（平安後期・12世紀半ば）東京国立博物館・徳川美術館
ｂ．天理図書館本『源氏物語絵巻』（鎌倉時代後期・13世紀末）
ｃ．天理図書館蔵・土佐光信筆奈良絵本『源氏物語』絵合（室町時代・1500前後）
ｄ．和泉市久保惣記念美術館蔵・土佐光吉筆『源氏物語手鑑』慶長17年（1612）
ｅ．京都国立博物館蔵・土佐光吉筆『源氏物語画帖』慶長18～19年（1612～３）以前
ｆ．徳川美術館蔵・土佐光則筆『源氏物語画帖』（土佐光則1583～1638）
ｇ．宮内庁三の丸尚蔵館蔵・狩野探幽筆『源氏物語図屏風』寛永19年（1642）
★ｈ．石山寺蔵四百画面『源氏物語画帖』（土佐派・江戸中期）★

１、若紫巻 北山の光源氏弾琴―ａ，ｂ，ｇ，h4/11（注４）
２、末摘花巻 常陸宮邸の末摘花弾琴―ｂ，ｄ，ｅ，h10/1
３、須磨巻 光源氏つれづれに弾琴―ｆ，h9/14，12/14
４、絵合巻 冷泉帝御前の絵合の弾琴―ｃ，h4/4
５、松風巻 明石の君の弾琴―ｇ，h3/7
６、初音巻 正月明石の御方にて―ｆ，h1/4，4/4
★　若菜上巻 玉葛若菜進上の儀―h5/15
７、若菜下巻 女楽の女三宮の弾琴―ｄ，ｇ，h7/13
８、鈴虫巻 六条院女三宮のもとで光源氏弾琴―ｄ，ｆ，h3/14
９、橋姫巻 宇治八宮邸での八宮弾琴―d，h7/8
★　椎本巻 八宮邸で公達、八宮弾琴を所望―h2/5
10、手習巻 横川僧都妹尼の弾琴―d，h6/13

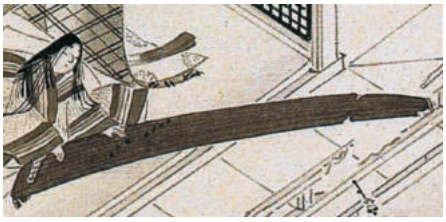
6、石山寺蔵四百画面『源氏物語画帖』の琴（きん）の絵画表現

Ⅰ．弾琴図

若紫四（37図）…光源氏弾琴

※北山の光源氏の弾琴場面。琴柱が七本描かれる。

末摘花一（46図）…末摘花弾琴

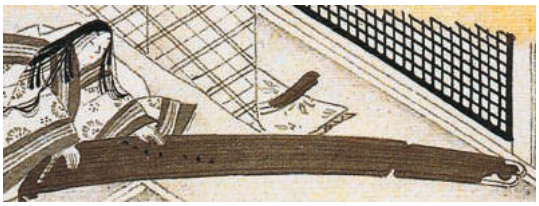


※末摘花の弾琴。琴柱が七本。徽はない。膝の上に載せていない。土佐派の図様。

絵合四（129図）…光源氏弾琴

※上段、琴（きん）を弾くのは光源氏。

若菜下七（244図）…女三宮弾琴

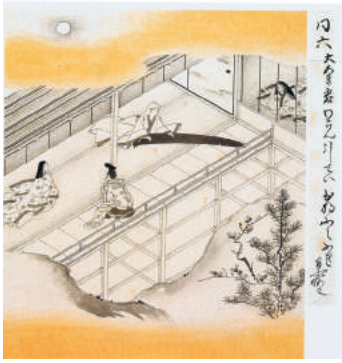


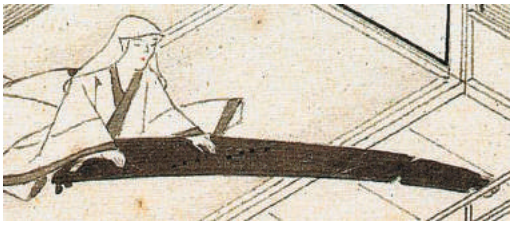
※六条院の女楽。上段、琴（きん）を弾くのは女三宮。七絃に琴柱七個。徽はナシ。中段、箏は明石女御。下段は和琴を弾く紫の上。最下段に琵琶。

橋姫七（310図）…八の宮弾琴

※十月、宇治の八の宮の邸を訪れた薫に琵琶を勧め、八の宮が琴（きん）を奏でる。

手習六（390図）





※短冊に「大あま君わごん引てい少将ふえふき給ふ所也」とあるが、楽器は琴（きん）であり、弾くのは横川僧都の妹尼。手習三にも同じ姿が妹尼として描かれている。短冊の間違い。

Ⅱ．琴（きん）が置かれた図

①須磨巻の琴（きん）が置かれた二図

須磨でのわび住まいに琴（きん）が欠かせない存在であった。須磨九図は光源氏の琴（きん）の音に対し、筑紫から都へもどる船上の筑紫の五節が光源氏に歌を贈る。そのやりとりの場面。ハーヴァード大学美術館蔵土佐光信筆『源氏物語畫帖』にも見られる図。須磨十二図は頭中将が都から光源氏を訪問。その場面にも琴（きん）が置かれている。

須磨九（95図）

須磨十二（98図）

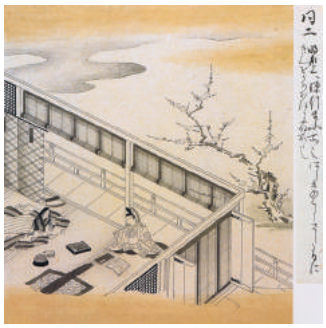
②光源氏が明石の君に残した琴（きん）

光源氏は、都に戻る時、形見として明石の君のもとに琴（きん）を残す。その琴（きん）が松風三と初音二の二場面に描かれている。明石姫誕生後、明石一行は上京して大堰に住む。初めての対面場面に光源氏が残した琴（きん）が描かれている。

明石姫は紫の上の養女となり母子は離れ離れになる。六条院が完成し、東南の町に光源氏・紫の上・明石姫が住み、北の町に明石君が住む。同じ敷地内に居ながら母子は会う事も話す事もできない。初音巻、元旦に明石君は姫に、初音を聞かせてほしいと手紙を贈る。図はそんな明石君を光源氏が見舞った場面。形見の琴（きん）は褥の上に載せられている。ハーヴァード大学・光信本にもある図。

松風三（132図）

初音二（169図）



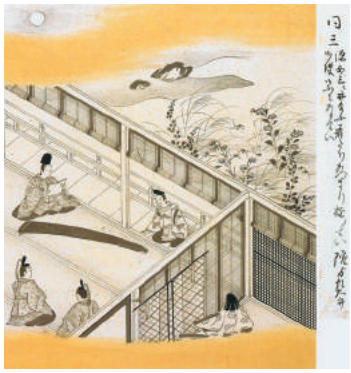
③六条院の琴（きん）

若菜上五（227図）

※光源氏の四十の賀に、玉葛が若菜を献じた。その後、宴は管弦の遊びとなった。蛍兵部卿宮が琴（きん）を光源氏に譲り、柏木が和琴を弾く。

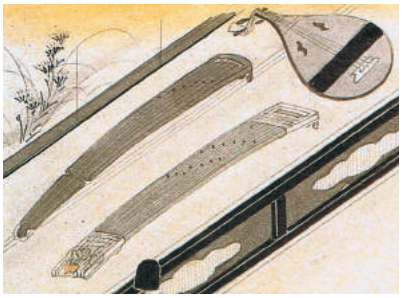
鈴虫三（262図）

※光源氏は六条院寝殿に住む出家した女三宮のもとで、琴（きん）を弾く。公達が集まり、管弦の遊びとなる。そこへ冷泉院の手紙が届く。琴（きん）を置き手紙を読む場面。



④八の宮邸の琴（きん）

椎本二（313図）



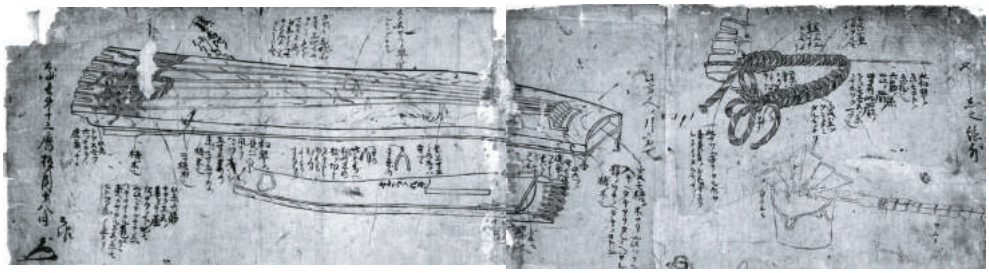
※八の宮邸に公達が集まって、これから管弦の遊びが始まる琵琶・琴（きん）・箏が用意 されている。

７、物語絵の中の最古の和琴

日本最古の和琴の絵は、国宝『源氏物語絵巻』にはなく、その少し後に成立した大和文華館蔵国宝『寝覚物語絵巻』（平安時代後期）第２段に描かれる和琴であろう。右隅に垣間見の男（まさこ君）。簀子に女童、廂の間で向かい合う女性たち。手前に和琴、向い側に箏。和琴は六本の絃が描かれ、琴尾に絃と結合した葦津緒（あしづを）らしきものが描かれている。成立当時はこのように細かったか？琴面には華麗な模様が描かれていたと推測される。総じて精細な描写で楽器類も正確に描こうとする意図が見える。国宝『源氏物語絵巻』の箏に琴柱が描かれ、以後の源氏絵に踏襲されたが、この絵に琴柱は確認できなかった。※大和文華館より国宝『寝覚物語絵巻』の熟覧を許され、実見することができた。また、掲載許可もいただいた。記してお礼申し上げる。

８、土佐派の和琴図

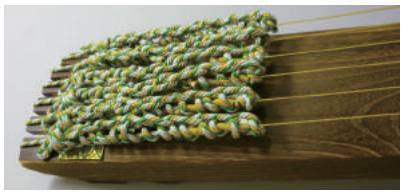
前号で紹介した土佐家粉本の中の和琴図。琴面、琴頭、琴尾、葦津緒の構造まで精細に分解して描く。慶長13年の土佐光吉の画いたものと推定したが、彼の和琴の作例は残らない。



徳川美術館蔵・土佐光則筆

『源氏物語画帖』常夏の話琴

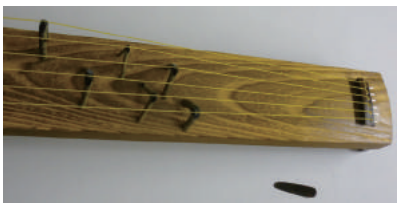
土佐派で最初に確認できる作例は土佐光則筆『源氏物語画帖』の常夏巻。御簾の中の玉葛の横に置いた図である。土佐家粉本に忠実であり、琴尾が描かれ、六絃と葦津緒、「赤の錦二寸ばかり」がそのまま描かれる。下は東京成徳短期大学所蔵の和琴。



⇦琴尾の葦津緒

⇩琴頭と琴軋

琴柱は楓の枝⇨



9、源氏絵に描かれた和琴の場面

『源氏物語』において和琴が描かれる場面は、石山寺蔵四百面『源氏物語画帖』（江戸中期）を含めると、以下のような追加がみられる（★印）

⑴ 帚木巻雨夜の品定め・木枯らしの女の話
★ 若紫巻⇨光源氏、大殿で和琴を独奏―h8/11
⑵ 花散里巻⇨「よく鳴る琴」＝和琴、源氏絵では箏を描く―d，e，f，h1/2
⑶ 絵合巻⇨冷泉帝御前の絵合での宴―c和琴なし，h4/4
⑷ 常夏巻⇨光源氏が玉葛に和琴談義。―f，h2/4
⑸ 篝火巻⇨「御琴を枕にて」―箏を描くd，e，f，g，h1/2 ★公達の合奏h2/2
★ 梅枝巻⇨薫物合わせの宴h4/7
★ 若菜上巻h5/15 ,11/15 ★若菜下巻住吉詣h5/13
⑹ 若菜下巻の女楽―d，g，h7/13
⑺ 横笛巻⇨落葉宮のもとで柏木を偲ぶ夕霧―g，h2/4
★竹河巻h2/10，9/10
★宿木巻h11/12
⑻ 東屋巻⇨宇治にて薫が浮舟に「あづま（和琴）」は弾けるかと問う―d
⑼手習巻⇨小野にて中将が横笛、妹尼が琴（きん）、母尼が和琴で合奏―d

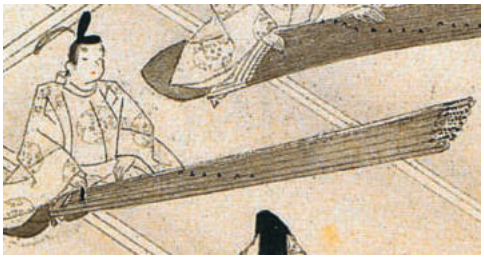
10、石山寺蔵四百面『源氏物語画帖』の中の和琴

和琴の弾奏図は九図、他に置かれた和琴、袋に入った和琴など六図ある。以下見ていく。

Ⅰ．和琴弾奏の図　右膝の上に載せ、座奏。右手に琴軋（ことさき）を持ち、左手も使う。

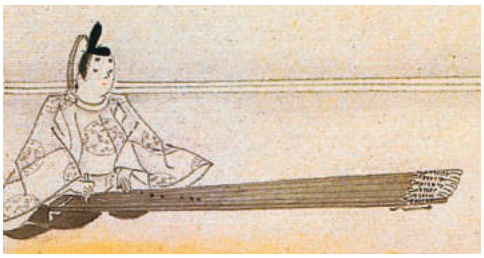
A　若紫四　光源氏

B　絵合四　権中納言（かつての頭中将）



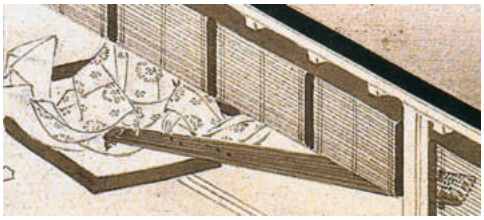
C　常夏二　光源氏

E　梅枝四　柏木（右膝の上）

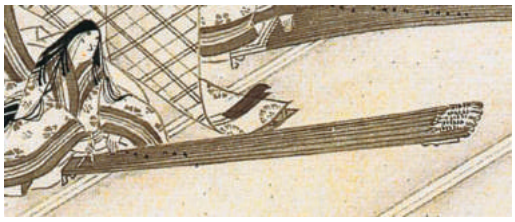


D　篝火二　光源氏

F　竹河九　冷泉院（右膝の上）

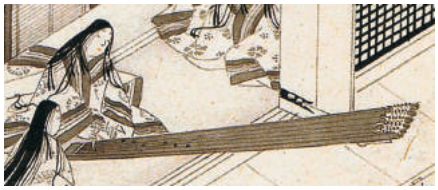


H　若菜下　七紫の上



G　若菜下五　神楽伴奏（右膝の上）

I　竹河二　玉葛の女房



Ⅱ．琴軋（ことさき）…ＢとＣは黒。他は白い棒状のもの

A
B
C
D
E

F
G
H
I

Ⅲ．管弦の遊びの楽器の位置

絵合と女楽の二場面、ともに上から琴（きん）・箏・和琴・琵琶。琵琶の向きが異なる

絵合四（129図）和琴は頭中将

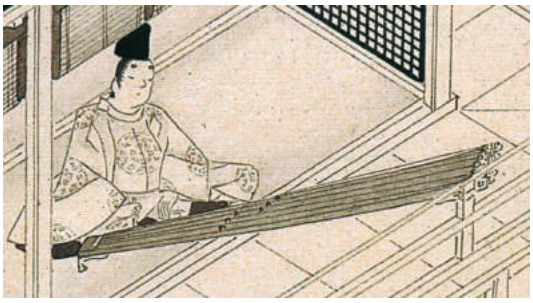
上―琴（きん）…光源氏、中―箏…帥の宮
下―和琴…権中納言琵琶…少将の命婦

若菜下七（244図）…女楽の紫の上の和琴。

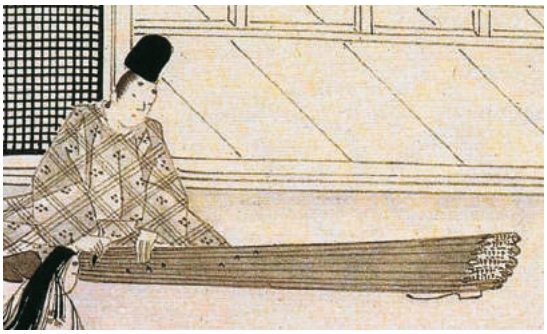
上―琴（きん）…女三宮、中―箏…明石女御
下―和琴…紫の上、琵琶…明石君

Ⅳ．光源氏と和琴

若紫八（42図）…左大臣邸で和琴を独奏する光源氏。右膝の上には載せていない。右手に琴軋、絃６本、琴柱６個。

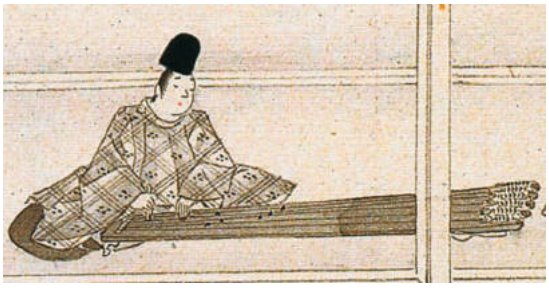


常夏二（180図）…西の対で父親の話をし、玉葛に和琴を聞かせる光源氏。この場面の琴軋は黒。右膝上にあるかは見えない。



篝火一（183図）…「御琴を枕にて」和琴であるべきところ、箏を描く。他の源氏絵と同じ。

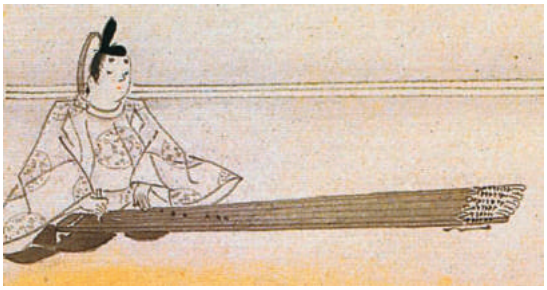
篝火二（184図）…和琴は光源氏。笛は夕霧。柏木が隣。和琴の頭を右膝上に載せていない。これが光源氏のスタイルなのだろうか。琴軋は白。



Ⅴ．柏木と和琴

①梅枝四（213図）…和琴（六絃、六琴柱）を弾く柏木。琴頭を右膝上に載せ、座奏。琴軋は白。

正しい姿勢で弾いているが、柏木弾奏図はここだけ。



②若菜上五（227図）…柏木が和琴を弾く。その音は父大臣を彷彿とさせる。

この図は弾いていない。

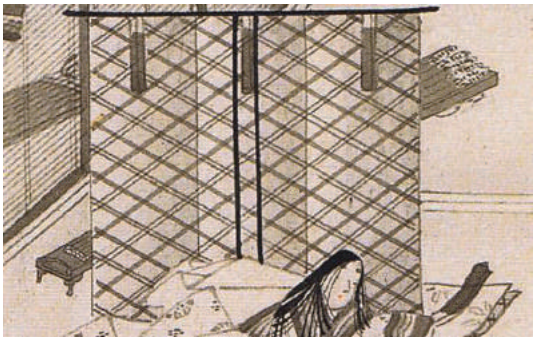
③若菜下二（239図）

柏木が東宮に和琴を伝授している場面。この機会に女三宮の唐猫を借り受ける。猫とともに和琴が二面描かれ、東宮の和琴の師としての柏木の立場が明確にされている。

畳の上の東宮の前に和琴、逆向きに柏木の前にも一面おかれるが、柏木は猫に夢中。石山寺本独特のおもしろい構図である。

横笛二（257図）…女二宮（落葉宮）邸に置かれた柏木の遺品の和琴。和琴は柏木を象徴する。

夕霧は柏木遺愛の笛を吹く。落葉宮の前には箏。琵琶もあり、和琴は几帳で隠れ、琴頭と琴尾のみが見える。柏木の死を暗示しているのだろう。

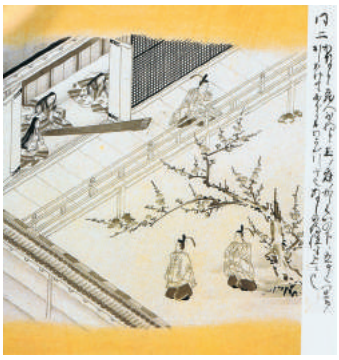


Ⅵ. 石山寺本独特の場面・その他

若菜下五（242図）…住吉大社神楽。神楽の伴奏として、和琴が奏される。この場面もめずらしい。

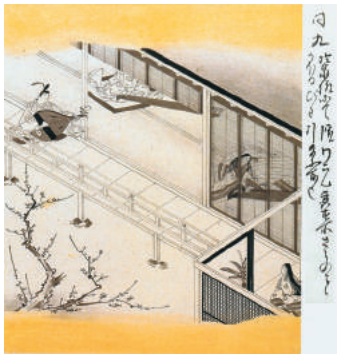
竹河の二図

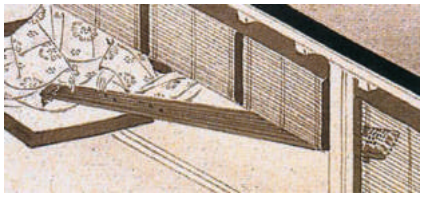
竹河二（295図）…玉葛邸紅梅に薫と蔵人少将



玉葛の女房が弾く図。女性の弾奏図はここ女楽の紫の上と二つだけである。

竹河九（302図）…冷泉院の和琴弾奏図は珍しい





冷泉院の弾琴図。高貴な人の顔は御簾で隠し描かない。右膝上に載せ、正しく座奏。

Ⅶ 袋と和琴

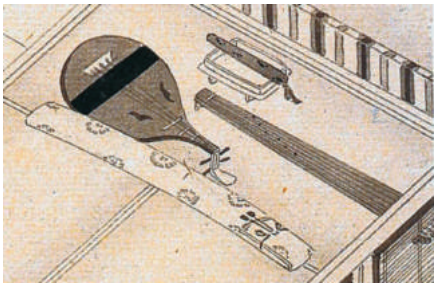
〈袋から和琴を出す〉

初音四（171図）…踏歌の後宴を計画し「御琴どものうるはしき袋どもして秘めおかせたまへる、皆引き出でて、おしのごひて、ゆるべる緒ととのへさせたまひなどす」とある場面。光源氏が、和琴を袋から出している。

〈袋に入れた楽器〉

若菜上十一（233図）…帝の使いで四十賀の祝いに訪れた太政大臣に光源氏から「すぐれたる和琴」などの御贈物があった。和琴は袋に入れられている。細やかな描写。

宿木十一（342図）…藤壷で帝主催の藤の花の宴。朱雀院の遺品の楽器、柏木の笛が並ぶ。和琴が見える。袋に入っているのは、箏であろう。



10、おわりに

石山寺蔵『源氏物語画帖』においては、琴（きん）の弾奏図は光源氏、末摘花、女三宮、八の宮、横川僧都の妹尼が描かれている。置かれた琴（きん）は須磨の光源氏のわび住まいを象徴し、明石の君に託した琴（きん）も繰り返し描かれる。物語の中で琴（きん）の意味が正確に認識され、必要不可欠な場面で描かれているといえよう。土佐派は琴（きん）にあるはずのない琴柱を描き、護軫を保護しない弾き方で描く。石山寺本は正しく土佐派のものである。

和琴の弾奏図は光源氏、絵合の権中納言と柏木の親子、女楽の紫の上、竹河巻の玉葛の女房。若菜上巻の住吉大社の神楽伴奏の図や竹河巻の冷泉院の弾奏図などめづらしい図様が多い。若菜下巻に「御琴など教へきこえたまふ」を口実に猫を入手する場面。東宮と柏木が和琴の師弟であると解釈してレッスン場面が描かれており、独特の図となっている。頭中将の和琴の血筋は、柏木に、そして玉葛と薫にも繋がり、柏木亡き後の遺愛の和琴も描かれる。だが、玉葛の弾奏図はない。他の源氏絵と同様、「御琴を枕に」は箏が描かれている。和琴の弾奏図、特に柏木と冷泉院、神楽伴奏は実物を見て描いていると考えられ、和琴がほとんど描かれない土佐派においては大きく進歩している。

【注】

注１　『講座平安文学論究』第八輯「石山寺蔵「白描源氏物語画帖」について―源氏絵場面集の一例として―」（風間書房、1992・５刊）

注２　中国の博物館第４巻『南京博物館』（南京博物院編、1982・6，講談社）羅宗真氏解説による。

注３　前号第43号に誤植があった。67頁下から３行目「龍」を「韻」に、則ち「鳳沼（韻沼）」に訂正。

注４　このh4/11は石山寺本の若紫全11画面中４番目の図を示す。